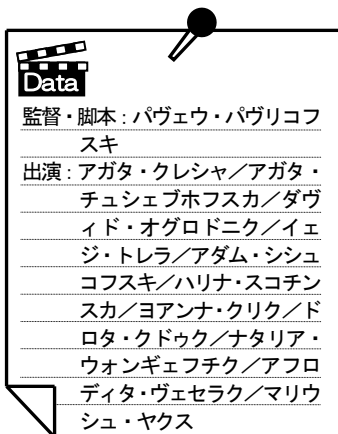




👁️👁️ みどころ

ポーランド映画は、ナチス問題やユダヤ人問題が絡んだ難しいものが多い。したがって、問題提起作であっても観客を集めるのは難しいが、なぜか地味な本作は大ヒット！その要因の1つは、チラシに映る、修道士見習いの、陰しくも魅力的な表情にあるが、内容はメチャ難しい。

女2人の「ルーツを辿る旅」で得たものは何とも厳しいものだったが、そのことで「心の決壊」を体験した2人のその後の生きざまは・・・？

近時の邦画とは全く異質な「ポーランド派」の正統作をしっかりと鑑賞し、しっかり思索したい。

———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ————

■□■地味なポーランドの映画が大ヒット！■□■

ポーランド映画と言えば、私には『灰とダイヤモンド』（58年）のアンジェイ・ワイダ、『ゴーストライター』（10年）（『シネマルーム27』143頁参照）のロマン・ポランスキーという二大監督（？）の名前が思い浮かぶ。パンフレット冒頭の「解説」によれば、ワイダは『尼僧ヨアンナ』（61年）のイエジー・カヴァレロヴィッチや『鉄路の男』（57年）のアンジェイ・ムンクラと共に、1950年代後半に「ポーランド派」として世界の映画人を驚かせた監督だし、ロマン・ポランスキーは彼らに影響を受けて斬新な映像作品を発表した監督らしい。

しかして、本作の監督は、「ポーランド派」が台頭してきた1957年にワルシャワで生まれたパヴェウ・パヴリコフスキ。彼は14歳の時に共産主義体制のポーランドを出て、ヨーロッパ各地で作品を撮り続けてきた映画作家らしい。とはいっても、そもそもポーラ

ンドに馴染みの薄い日本人、とりわけ昨今の薄っぺらでとにかくわかりやすい邦画に慣れてしまった日本人は、そんなことには誰も興味を持たないはず。そう思っていたが、「ポーランド映画祭2013」でプレミア上映されて多くの観客を魅了し、2013年BFIロンドン映画祭最優秀作品賞、2013年トロント国際映画祭国際批評家連盟賞、2013年ワルシャワ国際映画祭グランプリ・エキュメニカル審査員賞を受賞したという本作は、単館上映、しかも1日2度の上映しかないにもかかわらず、大ヒット！

これは、チラシに大きく載った、髪をベールで覆った修道女の姿をした少女イーダ（アガタ・チュシェブホフスカ）の魅力によるものだけではないはずだ。そのチラシに書かれた文字は、「わたしは誰？」「1962年ポーランド。少女は自分の出生の秘密を知るため旅にでた……」とだけだ。きっと、重くしんどい映画だろうが、こりゃ必見！

■■ポーランド（人）とユダヤ・ドイツ・ソ連との関係は？■■

8月17日付産経新聞は、文部省が目指す高校日本史の必修化に伴う措置として、「近現代史を学ぶ現行の「日本史A」と「世界史A」を統合して新科目を創設する案が浮上している」ことを報じた。多くの日本人は、日本の近現代史ですらあまり勉強していないのだから、ポーランドの戦後史を知っているはずはない。私でも、1939年10月1日にナチスドイツがポーランドに侵攻したことは知っていても、その後の知識はナチスドイツの崩壊、連合軍のノルマンディへの上陸、フランスの解放等々の断片的な歴史だ。その点、映画は非常に便利なもので、『史上最大の作戦』（62年）等々からは多くの歴史を学ぶことができる。アンジェイ・ワイダ監督の『灰とダイヤモンド』も、ビックリさせられた1つの歴史上の事実だ。

しかして、本作のパンフレットには久山宏一（ポーランド文化研究者）の「1962年前後のポーランド事情—『イーダ』の歴史的背景」という4頁にわたる解説があるが、これは必読！そこに書かれてあることは、ほとんどがはじめての知識だし、これを読むか読まないかによって、本作の理解の度合いは大きく異なるはずだ。

■■イーダ以上に、ベテラン女優演ずるヴァンダに注目！■■

私がとりわけ興味を持ったのは、本作の冒頭、尼僧アンナ（アガタ・チュシェブホフスカ）が、院長（ハリナ・スコチンスカ）から唯一の身内だからと言って、訪れるよう命じられた叔母のヴァンダ・グルーズ（アガタ・クレシヤ）。天涯孤独の身と思っていたアンナにしてみれば、「何を今さら！」ということだが、院長の命令とあれば仕方ない。しかし、唯一の親戚であるなら、なぜ今まで1度も修道院に自分を訪ねて来なかったの…？そんな気持ちを持ちながら、1人ヴァンダを訪ねたアンナが聞いた言葉は、「あなたはユダヤ人なのよ。本名はイーダ・レベンシュタイン。」という衝撃的なものだった。

本作は「ポーランド派」の系譜を引く映画らしく、セリフは極端に少ない。もちろん、

ナレーションなどは全くない。したがって、ポーランドの戦後事情に詳しくない観客は、このヴァンダの氏素性はわかりにくい、一瞬登場する法廷シーンを見れば・・・？ここでパッと理解できる人は少ないと思うが、イーダの出生の秘密を探る旅の中で、ヴァンダは現職の判事であること、そしてその過去は検察官として著名な事件にも関与し、被告人を死刑に導いたこともあることが明確に語られる。ところが、イーダがヴァンダの家を最初に訪れたときもヴァンダの家には男がいたし、出生の秘密を探る旅の中でもヴァンダは酒は飲むわ、タバコは吸うわ、さらにサックスを吹く若いイケメンの男リス（ダヴィド・オグロドニク）と知り合うやすぐにちょっかいを出すわ（？）と、やりたい放題。これが現職の判事？しかも、飲酒運転で捕まると「私は判事よ！」と権威をひけらかして釈放を迫る始末だから、かなりタチが悪い。

本作ではもちろんイーダが主人公だが、ストーリーを引っ張るのはむしろこのヴァンダだから、そのキャラと彼女が背負っている重荷に注目！

■□■女2人の重苦しいロードムービーで得たものは・・・？■□■

広島市北部の新興住宅街では、8月17日以降の大雨による土砂崩れによって多くの被害が出ている。しかし、土砂災害防止法に基づく土砂災害警戒区域や特別警戒区域の指定はマスコミが騒ぐほど容易ではない。だって土砂災害警戒区域や特別警戒区域の指定がされると不動産の財産的価値が下がるとして指定に反対する人もいるし、土砂災害警戒区域や特別警戒区域に指定されてもなお、そこに住むしかないという事情を抱えている人もいるのだから。

しかして、ヴァンダがイーダを伴って最初に訪れたのは、元イーダたちが住んでいたはずの家だが、そこには今、フェリクス・スキバ（アダム・シシュコフスキ）という男が住んでいた。フェリクスは、「ここにはユダヤ人夫妻が住んでいたはずだ」というヴァンダの質問に対して、「何も知らない」と答えたが、ヴァンダの剣幕におどおどしている様子は明らかだ。それは、一体なぜ？フェリクスが知らないと言うのなら、その両親はユダヤ人夫妻の最期を知っているはずだ、と迫及したヴァンダは、フェリクスの父シモン（イエジ・トレラ）を探し出し、その居所を突き止めたが、今彼は重い病気を患い街の病院に入院していた。

そこでヴァンダがイーダと共に聞き取った事実は、広島市北部の災害による惨事をはるかに上回る、何ともむごいものだった。土の中から掘り起こされた3つの頭蓋骨。それを布に包んで抱きしめ、別の場所で土の中に埋めなおす2人の作業。ルーツを辿る旅の中で得られたそれらの「成果」は、今後の2人の生き方にどのような影響を及ぼすのだろうか・・・？

■□■ルーツを辿る旅の後の変化は？ヴァンダの場合■□■

本作では、全編を通じて音楽が大きなポイントを握っている。とは言っても、その内容はほとんどわからないので、ちゃんと理解しようと思えば、パンフレットにある、小沼純一（音楽・映画批評）の「イーダ、音楽がよりそう目覚め」という解説を熟読する必要がある。もっとも、詳しくわからなくても、2つの印象的な音楽のポイントは私にもわかる。その1つは、2人がルーツを辿る旅の中で偶然出会った、前述の若くてハンサムなミュージシャン、リスとの出会いだ。こんな重苦しい「ロードムービー」の中に、ヒッチハイクによって突然ハンサムな男が1人加わったことが意外なら、ヴァンダがいそいそとおめかしをしてジャズ演奏の場にてかけていくのも意外だった。もちろん、イーダはひとりモータール内でもヴァンダの帰りを待っていたが、夜中に酔っぱらって帰ってきたヴァンダは一体リスに何を求めていたの？ 神に仕える身のイーダがこんな西洋の快樂に興味を示すはずがないのは当然だが、その後の展開を見ていると、意外にも・・・？

他方、イーダが訪れた時からヴァンダの部屋の中は、レコードの音で満ちあふれていた。それは車に乗ってルーツを訪ねる旅でも同じで、車の中はヴァンダが吸うタバコの煙とともに、カーラジオからの音楽でいつも満ちあふれていた。そしてまた、当然しゃべるのはいつもヴァンダで、イーダはいつも黙っただけだった。そんな2人の奇妙なルーツを辿る旅は4日間で終わったが、この旅によって「心の決壊」を体験せざるをえなかった2人には、以降対照的な変化が起きるから、それに注目！

モーツァルトが交響曲を41曲も書いたことはよく知られているが、その最も有名なものは41番の『ジュピター』。その旋律はいつ聴いても雄大なものだが、部屋の中でひとときわそのボリュームを大きくしたヴァンダが取った、あっと驚く行動とは？ これはあまりにも短いシーンなので下手すると見落とすかもしれないが、本作を鑑賞するについては決してそのようなことのないように。久山宏一（ポーランド文化研究者）の前記解説によれば、ヴァンダという名前を聞くと、ポーランド神話の有名なヒロインのヴァンダという名前が浮かぶらしい。また、スターリン時代には「血のヴァンダ」は有名な検事だったらしい。そんなヴァンダが、ルーツを訪ねる旅を終えた後、一体なぜこんな行動を・・・？

■□■ルーツを辿る旅の後の変化は？イーダの場合■□■

若い女性が急に「変身」することはよく見かけるが、その原因の大半は男。あのルーツを辿る旅の中で、年上のおばちゃんヴァンダとリスとの間には何もなかっただろう。しかし、リスと2人きりになった部屋の中でベールを脱ぎ、美しい髪を下ろしているイーダの姿をみていると、ひょっとしてあのとき2人は？ そんなシーンを見れば男女を問わず誰でもそんな想像をたくましくしてしまうのは当然だが、ヴァンダがいなくなった部屋にイーダが入り込み、それまでの修道女見習いのイーダから、若く魅力的な女性に変身していくシークエンスは本作最大の見どころとなっている。

いくら修道女見習いであっても、それはあくまで姿形だけ。長い髪を下ろし、華やかな

ドレスを着て、ハイヒールを履けば、立派に魅力的な女だ。そしてまた、酒やタバコはヴァンダの専売特許ではないから、イーダだって……。さらに、当然のことながら、男だって……。裸になってリスと同じベッドの中に寝ているイーダを見ていると、なるほど、なるほど、やっぱり、なるようになったんだな、と妙に納得……。

意外なのは、そこで風来坊で遊び人そして女たらしのミュージシャンだと勝手に想像したリスがえらく真面目なこと。「海辺の街に行き、結婚して子供をつくり、犬を飼い、家を買って一緒に暮らそう」と提案するとは……。もちろん、イーダの出生の秘密がバレ、そのルーツがユダヤ人だということがわかって、そのようなハッピーエンドが拒否されるワケではない。修道院だってイーダはまだ修道女見習いだから、ここでやめることもできるはずだ。ただし、本作にはそんなハッピーエンドがふさわしくないことは明らかだが……。

■□■結末は、あなた自身の目でじっくりと……。■□■

人間にはいろいろな欲望があるし、夢もある。小さい時から戦争孤児だと言われ、田舎の修道院の中で育てられたイーダは、世間と接することもないまま精神的バランスを保っていた。しかし、ヴァンダとのルーツを辿る旅によって一気にさまざまな情報を得るとともに、生き方の多様性を自覚してくると……。酒、タバコ、ジャズという体験がはじめてなら、男、結婚、2人だけの生活という夢を描くのもはじめてだ。修道院に戻ってみると、イーダの同僚の修道女見習いたちのうち2人は予定どおり修道女への道を決意し、その儀式に臨んだが、さてイーダの選択は？

他方、誰もが驚くのが、イーダとともにルーツを辿る旅の中で「血のヴァンダ」として名をはせたヴァンダの身に起きた決壊。イーダに出会うまではバラバラになりかけていた精神を酒、タバコ、男、音楽で紛らわせていたヴァンダは、イーダとのルーツを辿る旅を終えた後、なぜあのような行動をとったの？その両者について、私の評論では一切触れないのでそこはあなた自身の目でじっくりと確認し、考えてもらいたい。

私の目にはヴァンダの行動が意外なら、イーダの行動も意外。でも、それをホントに理解するためには本作のパンフレットにある小沼純一氏と久山宏一氏の解説を読み込み、イーダとヴァンダが生きていく上での背景となっているさまざまな事実を理解する必要がある。それを痛感し、理解不十分だということを前提としつつ、以上で本作の評論としたい。

2014（平成26）年8月28日記